

令和2年度作品集

平和

コンクール



第20回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立湖畔小学校4年 門間 大明 さん

釧路市平和都市推進委員会

目 次

第20回平和絵画コンクール

最優秀賞	湖畔小学校4年	門 間 大 明		1
優 秀 賞	清明小学校4年	池 端 和々子		
優 秀 賞	愛国小学校2年	八 田 胡々音		2
優 秀 賞	中央小学校1年	矢 柳 加 奈		
優 秀 賞	湖畔小学校4年	阿 部 晃 大		3
佳 作	共栄小学校3年	北 田 澄 怜		
佳 作	光陽小学校4年	宮 脇 大 和		4
佳 作	清明小学校1年	池 端 今 子		
佳 作	清明小学校6年	小田嶋 柚 夏		5
佳 作	愛国小学校2年	細 野 陽菜子		
佳 作	愛国小学校3年	岡 村 愛 菜		6
佳 作	愛国小学校4年	笠 島 悠 愛		

第33回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	景雲中学校2年	高 山 果 恋	燃える広島ので	7
優 秀 賞	幣舞中学校3年	小笠原 奏 子	幸福と安心の主張	9
優 秀 賞	附属釧路中学校3年	高 尾 雪 菜	もし戦争がなかったら	11
優 秀 賞	北中学校3年	岩 井 美 咲	「平和ということ」	13
佳 作	附属釧路中学校3年	鮫 島 悠 香	「今」を生きる私達の使命	15
佳 作	附属釧路中学校3年	千 葉 祐 莉	原爆の怖さ	17
佳 作	附属釧路中学校3年	山 崎 舞 美	平和な世界になりますように	19
佳 作	景雲中学校2年	森 京 也	人を助けたいという気持ち	21
佳 作	附属釧路中学校3年	下 村 佳 暖	願いを込めた千羽づる	23
佳 作	附属釧路中学校3年	三 浦 梨 央	未来の平和	25
佳 作	附属釧路中学校3年	岩 城 妃 奈	過去をみつめて	27
佳 作	幣舞中学校2年	小 林 瑞 歩	戦争がなくなる世界に	28
佳 作	音別中学校2年	菅 野 凜 桜	原爆への思い	29

第19回平和の主張コンクール

最優秀賞	釧路湖陵高校3年	樋 渡 羽 奏	時代とともに移りゆく平和	30
優 秀 賞	釧路北陽高校2年	仲 谷 凜 彩	今の日本と平和	32
優 秀 賞	釧路明輝高校1年	伊 藤 麻 琴	スポーツと平和	34
優 秀 賞	釧路明輝高校2年	山 本 愛	尊き平和へ	35
佳 作	釧路明輝高校3年	岩 崎 結 衣	当たり前は奇跡	37
佳 作	釧路北陽高校2年	白 幡 虹 斗	戦後の日本はどこへ？	39
佳 作	釧路明輝高校2年	本 間 莉 望	戦争から学ぶこと	41
佳 作	釧路明輝高校1年	高 坂 美 来	平らに和む	42
佳 作	釧路北陽高校2年	田 中 有 紗	平和とは？	44
佳 作	釧路北陽高校2年	本 川 琳 久	平和で過ごすために	46
佳 作	釧路明輝高校2年	高 橋 亜 美	私にできること	48
佳 作	釧路明輝高校2年	原 口 星 那	私の主張	50



第20回平和絵画コンクール
 最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）湖畔小学校4年 もんま ひろあき
 門間 大明



第20回平和絵画コンクール
 優秀賞（釧路市議会議長賞）清明小学校4年 いけはた ななこ
 池端 和々子



第20回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）愛国小学校2年 八田 胡々音



第20回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）中央小学校1年 矢柳 かな



第20回平和絵画コンクール
 優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 湖畔小学校4年 阿部 晃大



第20回平和絵画コンクール
 佳作 共栄小学校3年 北田 澄伶



第20回平和絵画コンクール
佳作 光陽小学校4年 宮脇^{みやわき} 大和^{やまと}



第20回平和絵画コンクール
佳作 清明小学校1年 池端^{いけがは} 今子^{いまこ}



第20回平和絵画コンクール
 佳作 清明小学校6年 小田嶋^{おだしま} 柚夏^{ゆうな}



第20回平和絵画コンクール
 佳作 愛国小学校2年 細野^{ほその} 陽菜子^{ひなこ}



第20回平和絵画コンクール
 佳作 愛国小学校3年 岡村 おかむら 愛菜 まな



第20回平和絵画コンクール
 佳作 愛国小学校4年 笠島 かさじま 悠愛 ゆうあ

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

燃える広島ので

釧路市立景雲中学校 2年 ^{たかやま}高山 ^{かれん}果恋

終戦という「平和」のため、彼女たちは命という犠牲をなぜ払わなければいけなかったのか。原爆により、轟々と燃えさかる広島ので被爆し、亡くなった級友の事を想いつづつた関千枝子さんの著書『広島第二県女二年西組 原爆で死んだ級友たち』を一ページ一ページめくる度に私はこの気持ちが強く実を結んでいるのを感じた。ましてや、戦争と正面から向き合う彼女たちは何を求めているのだろうか。

一九四五年八月六日八時、二年西組の生徒たちは建物疎開作業として野外で瓦運びを行っていた。現在の中学二年生にあたる彼女らは「ハイ」「ハイ」と持ち前の元気なかけ声と共に迅速なスピードで瓦を積み上げていく。積み上げた瓦を背に笑顔を浮かべている彼女たちの姿が浮び、このまま時が過ぎて欲しいと私は強く願った。何事も無かったかのように。私はページをめくり、次の行へ恐る恐る目を走らせた。

「あっBが・・・」彼女たちの頭上にはB29から放たれたパラシュートがゆらゆらと落下していた。パラシュートには私たちがよく知っている原子爆弾がついていた。優雅に落ちてくる爆弾には自責の念など私には感じられない。そして、

「八時十五分。閃光と轟音。広島は死の街となった。」

爆風に吹き飛ばされた彼女たちは皆、大火傷をおっていた。火の海と化した広島ので身体からむけおちたどろどろの皮膚を引きずり、顔を血で染めた彼女たちの足は慌てることなく火の無い方へ向かっている。変わり果てた彼女たちの姿は痛々しく、それ故に戦争に対する闘志で燃えていたのだろうか。そこから、彼女たちは小集団となり病院や学校へと向かう。しかし、先程まで明るかった広島は真暗闇になり視界がきかなく、一・一キロメートルという僅かな距離で被爆した彼女たちは、重篤のため途中で力尽きた者、自力で病院や学校へたどり着いた者など様々であった。そして、この日を境に一人を除き、全員が二週間以内に昏睡に陥り他界した。この日、作業に参加せず生き残った生徒は関さんを含め六人のみ。広島第二県女二年西組は軽傷のため生き残った一人を含め七人となった。

惨い形でこの世を去った彼女たちは最後に何を思ったのか。ずっと信じて疑わなかった日本を初めて憎いと思ったのだろうか。だが、私の考えはすぐに打ち砕かれた。ほぼ昏睡状態に陥った彼女たちの大半が国歌を歌い、“日本は必ず勝つ。負けはしない。”と信じ死んでいったという。まさしく彼女たちが求めたものは戦争に対しての自由ではなく、戦争に対しての勝利だと結論づけた。私と同じ中学二年生の女の子が亡くなる間際でこのようなことを思っていたのか。戦争から七十五年後の今を生きる私にとって彼女たちの存在は

一生忘れないだろう。

彼女たちが生きた日々は決して「平和」であったとは言えない。それでも彼女たちは戦争に勇敢に立ち向い、原爆という《人間につくられたもの》により亡くなった。地震などの自然災害ではなく《人間につくられたもの》によって。私はこの事実気づいた時、思わず叫びたくなった。「平和」の代償を負わせたのは誰かと。

彼女たちと比べ、私たちはどうだろう。今の「平和」な時代に甘えきってはいないか。技術が発達し、現代では十分なほど何でも可能だ。でも、私はこの本を反芻する度にこのままでは駄目ではないか、亡くなった命を無駄にしないかと思う。そこにはいつも

「戦争をよく知ってもらいたい。未来につなげて欲しい。」

という関さんの願望があった。私は関さんの思いがつまったバトンを受け取った。私は受け取ったバトン未来へつなげたい。つなげた先には「理想の平和」があるのではないだろうか。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

幸福と安心の主張

釧路市立幣舞中学校 3年 おがさわら かなこ
小笠原 奏子

広島・長崎に原子爆弾が投下され、今年で七十五年になります。私は今、十四歳。当然私はおろか父と母も生まれていないため、私の周りには、七十五年前のあの日をよく知る人はいません。だからこそ、

「わからない、自分には関係ない。」

で済ませてはいけないと思います。私は読書感想文を書くにあたって、何冊か戦争についての本を読みました。それらが、『戦争』について書かれてあることは同じです。ですが、内容は全て異なっていて、本分だけ、人々の痛みや苦しみがありません。

中でも目に留まったのが、『広島・長崎からの伝言』という本の、ある言葉です。

「みんな無事で、よかった、よかった」

戦争のさなか、互いの安否を確認するこの言葉は、一見、珍しくは見えません。ですが、この一言だけで、沢山の意味があると私は思います。このセリフは、ある一家の物語の中に出てきます。セリフの次には、こうつぶられていました。

『別々の場所で被爆した一家七人が大やけどもせずめぐりあえたのは、ほんとに幸運だったでしょう。一家全滅になった家族もずいぶんありましたから。』

この物語の主人公であるヤチヨさんは、当時まだ小学一年生でした。お母さんと妹、お父さん、一番上のお姉さんは外出していて、もう一人のお姉さんも、お米を買いに行っているときに、爆弾は落ちたのです。ヤチヨさんは家にいたお兄さんと防空壕へ向かい、夜になって、お米を買いに行ったお姉さんとも合流しました。そして翌日になって、やっと外出していた四人も防空壕へやって来ました。お兄さん、お姉さんがいたとはいえ、子ども三人だけで、本当にまた会えるのかもわからない親を一晩待ったのです。そんな状況の後の、あの言葉。あなたなら、どう捉えますか。

この物語を読んだとき、私は自分の昔のことを思い出しました。家族で買い物をしていたあるショッピングセンターで、迷子になったことです。両親や姉とはぐれ、泣きたくなくなりながら店を歩き回りました。そのときは私が勝手に別の場所へ行ってしまったので、自業自得と言えそうなのでしょう。「もう会えないんじゃないか。」とすら思って、不安で仕方ありませんでした。結局会うことができ、大事には至りませんでした。そのときの「怖い」という独特な感情は、今でも忘れられません。

しかし、この当時はどうなのでしょう。通信機器も発達しておらず、家族が言った「よかった」の一言が、言えない可能性の方が大きかったのです。さらに、私のように自

業自得というわけではありません。突然降ってきた爆弾に、家族を、未来を奪われたとき、どこに向かって怒りをぶつければ良いのでしょうか。

戦争を生き残った人たちの苦悩は、私たちがたやすく知りえるものではありません。いつ空から降ってくるかもわからない爆弾に怯え、終戦してもなお、原爆病などによる差別に苦しんでいる人はたくさんいます。被害者から見れば、戦争は、終わっていないのです。もしかすると、自分が死ぬまで、自分の中の戦争は終わらない、という人も、いらっしゃるのではないのでしょうか。

突然ですが、みなさんは、日本国憲法第九条を知っていますか。第一項、戦争の放棄。第二項、戦力の不保持。私は、これほどまでに良い憲法はないと思います。戦争のない、いわば『平和な世界』というのは、その五文字が、誰もの願いであり、希望の光。その希望の光を日本に照らすために、この憲法は欠かせません。もちろん、日本が変わっただけで、この広い世界全てが変えられるわけではないでしょう。今この瞬間にも、同じ地球上で戦争が起こっているかもしれません。ですが、世界でただ一つの被爆国として、私たちは主張し続けなければいけません。戦争がないことが、どれだけ幸福なことかを。人々が争わないことが、どれだけ安心できることかを。そして、今の『あたりまえ』が、どれだけの人々の犠牲の上で成り立っていることなのかを。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

もし戦争がなかったら

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 高尾 雪菜 たかお ゆきな

戦争がなかったら。存在しなかったら。誰かはもっと笑顔に過ごせたかもしれない。誰かは今も生きていたかもしれない。このようなことを考えるきっかけになったのは、映画がもととなった、『この世界の片隅に』を読んだことだ。戦時中を生き抜いた人を描いた物語で、現代の生活とは違ってあの時代に絵を描いたり、お菓子を食べたり。普通の生活をしていたことをはじめて知った。そんな普通の生活をしているときに、「戦争」があらわれて、おそいかかってくる。どれほどの恐怖だっただろうか。いまを生きる私たちには理解しがたいことだけど、いまを生きる私たちだからこそ理解しようと努力したい。

この本は、人々の生活が決して戦争中心ではなかったことを教えてくれた。それまでの日常に戦争が加えられ、限られたものの中で日々の楽しみを見つける。ものがあふれている現代では気づけない楽しみがあったのかもしれない。少なくとも私はそれを知りたいと思う。食料が少なく、食事もろくにとれなかった時代。そんな中でも工夫してなんとか生き抜こうとする力強さを感じた。人の死が淡々と描かれる中、ある一人の死を重く受けとめ嘆く人がいる。今までの死も、死を軽視していたのではなくただいつも通り、普通に生きることをがんばっていたのだとはじめて気づかされる。

今の時代と昔の戦争の時代はつながっている。当たり前なことだけど、大切なことだと私は思う。今を生きる私たちが昔の戦争の時代を聞いて、「大変な時代だったんだな」とか、「とにかく悲惨で、とにかく毎日が辛く苦しい日々だったんだな」と思うことも大切かもしれないけど、時代はちがってもあの日原爆を落とされた日本と同じ日本。ここに住んでいる私たちが戦争を、原爆を客観視してどうなる？実際に原爆を体験した人たちには程遠くても、原爆の落とされた日本に住む者として、当事者と同じように原爆をなくすために声をあげるべきだと思う。

最後に、戦争は必要だったのか。戦争がなかったら、誰かはもっと笑顔に過ごせたかもしれない。誰かは今も生きていたかもしれない。涙を流す回数も少なかったかもしれない。人は普通に生活できるように努力したけど、戦争がなかったら努力がなくても普通に過ごせたかもしれない。

今はもう終わってしまったことで、「もし戦争がなかったら」と考えることしかできなくて、時間を戻すことはできない。だからといって戦争は本当になかったほうが良かったのだろうか。私はちがうと思う。戦争があって、日本に原爆が落とされたからこそ私たちは胸を張って「戦争はダメだ」、「原爆はなくすべき」と言えて、今でも人々に「戦争」と

いうものが伝えられて二度と同じような過ちをくり返さないように進められている。

戦争はこれからあってはいけない。そしてその時代を必死に生き抜いた人がある。それを決して忘れてはならない。こんなことに気づかせてくれたこの本に心から感謝したい。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

「平和ということ」

釧路市立北中学校 3年 ^い岩井 ^み美咲

私が今過ごしている環境はとても平和だ。そんなことは今まで幾度となく聞いたことがあるし、歴史やテレビで戦争等について見聞きする度に感じてきたことだ。

私が「黒い雨」という本を読んで感じたことは、今まで私が聞いたり思ったりしたことがあることばかりだ。「戦争はよくない。」「今の生活は平和だ。」「戦争は繰り返してはいけない。」「原爆は恐ろしい。」それでもこの本を読む前と後では、戦争というもののイメージや質感が大きく変わった。そう心の底から思う。

ヒロシマの原爆投下により被爆した閑間重松。重松とその妻のヨシ子は姪の矢須子の縁談を進める為に、矢須子が被爆していないことを証明しようと、矢須子と重松自身の日記の清書を始めた。しかし、皮肉なことにその日記の内容が、矢須子が投爆後に降る黒い雨をあび、被爆していたということを証明していつてしまう。その事実を書くべきか悩んでいる時に矢須子は原爆症を発病してしまう。必死に治療するが、病状は悪化してしまい、縁談も破談になってしまう。

私がこの作品の中で特に印象に残っている場面は、重松が被爆した仲間と始めた、鯉の稚魚の放養をしている池の見廻りに行く場面だ。私は今まで原爆が多くの人に被害をもたらしたことを、理解しているつもりでいた。しかしこの場面を読んだ後により原爆の被害の大きさを感じた。この場面では、被爆した人の生活や、被爆した仲間が投爆された時に何をしていたか等、具体的に書かれている。私は今まで一瞬で人生の全てが変わったことがない。しかしこの作品を読んで、被爆した人が一瞬にしてそれからの人生が大きく変わったことが直に伝わってきた。まともに働くこともできず、常に原爆症の悪化を恐れながら生活しなければならないというのは、今健康に生活している私には、とても想像できない苦しみがあるのだろう。そして、この場面を読んで特に感じたのは、原爆はその苦しみをととても多くの人に強要するものだということだ。私は原爆が投下された時のことも知らなければ、被害を直接みたことがあるわけでもない。今投爆された当時のことを少しでも知ろうと思えば、本や資料館等でみるしかない。しかし本や資料館等では被害の数を体感できることはあまりない。しかしこの作品を読むと、被爆者一人一人に投爆された当時の生活があったことをより実感することができ、被害の大きさを改めて実感した。

この作品を読み進めている内に、私が今まで感じていた戦争や原爆に対するイメージが大きく変わった。それは、作中の被害を受けた物や人に対する比喻が、あまりに想像し易く、そしてその情景が、とても怖かったからだ。今までテレビの特集等で、原爆や戦争の

被害について見てきたつもりでいたが、それは本当に一部なのだと痛感したし、きっと今私が戦争や原爆に対して分かっているつもりでいることもまた、ほんの一部に過ぎないのだろうと感じた。

この作品の最後で、全ての日記を清書し終えた重松は、養殖池から向かいの山を見上げ作中で悪いことの前ぶれと書かれている白い虹と対比させるかの様に、五彩の虹を想像し叶わないだろうと分かっているながら、矢須子の病気が治ることを願う。私はこの場面を読んで、原爆が理由で生活をする為にやっている鯉の稚魚の放養をしている池で、矢須子が原爆症になった大きな理由の黒い雨が降った空に矢須子の回復を願う重松に、泣きそうになった。そして、原爆が被爆者やその周りに与えた被害の大きさ、辛さを改めて感じた。

私が今過ごしている環境はとても平和だ。でも平和すぎて、いつか今この時が平和だということを、世界中の誰もが自覚できなくなったとき、きっとこの平和は終わるのだろう。だから私は、今が平和だという事を常に自覚しながら生きてゆきたいと思った。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「今」を生きる私達の使命

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 さめじま はるか 鮫島 悠香

皆さんはご存じでしょうか。長崎の原爆資料館に飾られている十一時二分で止まったあの時計を。一九四五年、十一時二分、長崎に原爆が投下されたと同時にその時計は、時間を止めました。そして同じように被爆者たちの時間も止めました。止められた彼らの時間は、もう二度と動き出すことはありませんでした。

今年の十二月、私は長崎の宿泊研修で、貴重な体験をしました。実際に原爆の被害を受けたある女性の体験談を聞いたのです。今まで私は社会科などの学習を通して、原爆の威力、残酷さは知っているつもりでした。つもりだったのです。しかし、実際に体験した方のお話は、私の想像の十倍、二十倍、いえ数字に表せないほどひどく、悲惨なもので私は思わず、逃げ出したくなりました。長崎に投下された原子爆弾は、多くの人々の命を奪っただけでなく、彼らが当たり前のように行っていた「家族や友達と話すこと」「食事をする事」それらの日常を奪いました。そして彼の愛した長崎の街も、一瞬にして焼野原へと変えてしまいました。その女性は、原爆で仲の良かった友達を亡くしたそうです。友達は原爆が投下される直前まで、元気にその女性と話をしていました。原爆により大切な人を失い、悲しみに暮れていた人もたくさんいました。そう自身の体験談を、涙ながら懸命に私たちに語る女性の姿に、私は深い感銘を受けました。

私は今回「はだしのゲン」という本を読みました。この本は、実際に原爆を体験された中沢啓治さんが書かれたお話です。一度読んだことのある本でしたが、今回の機会に改めて読み直してみると、原爆の威力、恐ろしさを伝えるには十分すぎる話でした。主人公ゲンは原爆により、父、妹、弟をいっぺんに失いました。家族を失うことは私が想像するよりも何十倍もつらいことなのでしょう。「芸術に国境はない。そうじゃ、わしは芸術で世界中の国をとびまわる男になりたい。けちな国境という垣根をとりはらえる男になりたい。」過酷な現実の中で懸命に生きたゲン。希望も持てないような生活の中で夢をみつけた彼の言い放った言葉に、私はひどく心を打たれました。そして、漫画家として反戦、反原爆の立場を貫こうとした中沢啓治さんの剛健な生き方に感銘を受けました。

核のない世界になる日は一体いつ来るのでしょうか。ストックホルム国際平和研究所は「まだ遠い。」としています。二〇一七年、核兵器の数は約一万四千九百三十五個とされています。世界全体の核兵器保有数が、過去最大の六万四千九十九個を記録した、一九八六年と比較すると、格段に数は減っていますが多くの人々の命を一瞬にして奪ってしまう脅威が世界にはまだ存在していると考え、私は恐ろしくてたまりません。近年では、近

隣諸国との関係悪化、領土問題等による国家間の対立が続いています。もしかするとまた戦争が起きる原因になってしまうのではないかと私は時々不安になります。世界で唯一の被爆国である日本は、他国と争うのではなく世界の先頭に立ち、「二度と戦争を繰り返してはならない。」ということを広く世界に伝えていくことが使命なのではないでしょうか。また個人の立場として考えたとき、「同じ過ちを繰り返してはいけない。」とただ口でいうのは簡単なことです。では、「今」を生きる私たちにできることは、一体何なのでしょう。それは「事実の伝承」です。私たちは知っています。戦争が、どれほど残酷なものかを。私たちは知っています。生きるということがどれほど尊いことなのかを。私たちは知っています。明日に、未来に希望を持てることがどれほど幸福なことなのかを。私たちは実際に経験した方の話を聞いています。そんな私たちはこの事実を、原爆の悲惨さを後世へと伝えていくべきです。もう二度と、あのような悲劇を繰り返さないために・・・。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

原爆の怖さ

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 千葉 祐莉

広島市の平和記念公園では、様々な場所で色鮮やかな折り鶴が見られるそうです。折り鶴は平和のシンボルと考えられているそうで、現在でも年間約一〇〇〇万羽もの折り鶴が、様々な国で平和を願って折られ、捧げられているということです。このように折り鶴が、平和と結びつけて考えられるようになったのは「佐々木禎子さん」という方の存在が大きく関わっているということを知り、今回「禎子の千羽鶴」という本を読んでみることにしました。

広島県で生まれた禎子さんは、二歳の時に被爆しました。その後、元気に成長していきましたが、十年後、突然体調が悪くなり、白血病と診断を受けます。入院して数ヶ月経ったころ同じ病院に入院していた小学五年生の女の子が、同じ病気の白血病で亡くなり、それをきっかけに死の恐怖と戦うことになりました。そんなある時、入院患者の各病室にお見舞いの品として、折り鶴が送られて来ました。父に「折り鶴を千羽折ると、願い事が叶う」という言い伝えを聞き、病気と闘いながらも元気になるという願いを込めて、一生懸命言い伝えを信じ、折り鶴を折り続けました。しかし、そんな願いもむなしく禎子さんは亡くなってしまいます。家族と幸せに生活していたはずなのに、たった一発の原子爆弾で、家族、健康な身体、尊い命までも奪われてしまいました。

禎子さんは、病気で辛いながらも家族に心配をかけたくなかつたので、「痛い」「苦しい」「助けて」などの言葉を一度も言わず、お見舞いに来た母にも関節痛が辛い中、誰の力も借りずに自分で歩いたそうです。そうやって、両親、兄弟を思いやり、又家族も病気に苦しむ禎子さんを思いやっていました。私なら「ここが痛い」「苦しいよ」などと弱音を吐いてしまうかもしれません。自分のことだけを考えてしまい、家族のことまで思いやることのできるだろうかと考えさせられました。私はこの本を通して「人を思いやる大切さ」を教えてもらいました。

私たちは、昨年十二月に長崎で「平和セレモニー」を行いました。平和セレモニーに掲げる折り鶴で、花束を作成しました。折り鶴の花束に込めた思いは、花には人を癒す不思議な力があり、そんな癒しや安らぎを与えられる花に、「原爆で亡くなった方々への追悼の思い」、「これからの長崎の平和を願う思い」をたくしながら折りました。この本をもっと早く読んでいれば、このセレモニーに対する思いが、もう少し深い思いになったかもしれません。

今回、この本を読んで、戦争があったということをおぼえてはいけません。二度と起こして

はいけないということを禎子さん、被爆した方々が教えてくれたのだと感じています。この尊い失われた命があったからこそ、私たちは今、平和に暮らすことができるのだと思います。あたり前の日常、しかしかげがえのない日常を精一杯生きていきたいと強く思います。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

平和な世界になりますように

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 ^{やまざき}山崎 ^{まみ}舞美

一年後、私は家族と幸せに暮らしていますように。ずっと幸せでいられますように。

私は最近ふと、このように想うことがある。私は、ある一冊の本を読んだから、考え方が変わった。

「この子を残して」この本をよんで、とても印象に残っている文がある。

「この子はついに父の顔も母の顔も知らずにこの世を去った。」

自分は今、父、母、兄、そして祖母など、家族に囲まれて暮らしている。でも、昔は「核兵器」というものによって、大切な人や日常を失っている。今、私たちが普通に生きているのは、あたりまえではないことを改めて強く感じた。そしてその恐ろしい「核兵器」はこの世にいくつも存在している。それは、私たちが死と隣あわせであるということ。そして、これに加え、この先大切な人とずっと一緒にいられる保障はない。本当におそろしい世の中だと、私はつくづく感じる。

二〇一九年十二月、宿泊研修で被爆地である長崎へ行った。被爆者の方からお話をきかせていただいた。強く熱く私たちへ語っていただいた。今でもずっと心に残っている。私は、その方が被爆した瞬間の話を聞いて、こんなにも長い年月がたっても、この恐怖は一生残るものなのだ、と知った。

私はこの話とこの本からたくさんのことを学んだ。そして学んだ私は今、なにができるのだろうか。行動に移すといっても、何をしたいのかわからないし、不安や恐怖がある。私はなにをすべきか、考え、自分なりの答えを導き出すことができた。それは、今を精一杯生き抜くこと。あのとき、生きたくても生きられなかった人たちのためにも、自分は精一杯生きようと思う。そして、いつなにが起こるかわからない、この世の中で後悔しないように一日一日をかみしめて生きる。これが私にできる全てだ。

この先の人生の中で、私は「感謝」も大切にしていこうと思った。あたり前だと思っていた日常があたり前ではない、と知ったからこそ、小さなことにも感謝を忘れないでいよう。家族や友人との時間を大切にすごそう。

「この子を残して」この本をたくさんの人によんでいただきたい。この本からたくさんを感じて。著者である永井さんは、爆心地からわずか七〇〇メートルの医科大で被爆をした。被爆をしても、子どもたちへ一生懸命に愛を注ぎ、たくさんの人々を助けようと必死に生きた。そしてこの書を書いて、亡くなった。永井さんの生きた証でもあるこの本を、本当にたくさんの人によんでいただきたいと、私は強く思う。

あなたは、今を必死に生きているだろうか。家族に一生懸命、愛を注いでいるだろうか。私は今までの十四年間を後悔している。家族へひどい態度をとってしまったことや、友達へひどい言葉をいってしまったこと、傷付けてしまったことなど、後悔ばかりだ。でも、この先、家族や友人と会えるとは限らない。だから私は、変わろうと思った。もっと素直に、気持ちを伝えよう。そして私はこの先ずっと祈りつづけよう。核兵器がなくなりますように。ずっと幸せでいられますように。そしてなにより、一刻も早くこの世界が、平和になりますように。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

人を助けたいという気持ち

釧路市立景雲中学校 2年 ^{もり} ^{きょうや} 森 京也

「他人から助けられるな。他人をとにかく助けるんだ。」これは、秋月医師が医療の現場の第一線を働く仲間達を激励する言葉である。僕は、自分を犠牲にしてまで救おうとする姿に、憧れを抱いた。医薬品も医療機器も人手も無く、診てあげれることしか出来ない中で、「臭い、熱い、痛い、助けて」と叫び続ける患者を前に奮闘する勇敢な姿に、尊敬の念を覚えた。自分が例え、医師という、どんな時でも患者を第一に考え、重い責任のある立場にあったとしても、終わりの見えない状況で、限りのない診療を続けるのは、気力も喪失してしまいそうだ。放心状態になってしまいうだろう。僕は小学校三年生の時に長崎の原爆記念館を訪れたことがある。そこには、多数の写真が保存されていた。黒焦げになってしまった小さい子、皮膚が垂れ下がっている女性、ガラスの破片が片側だけに大量に突き刺さった人々・・・その当時の僕は、怖くて、怖くて、まったく直視出来るものではなかった。今でもたぶんそう感じるだろう。可哀想で痛々しくて、複雑な気分。しかし、秋月さんは、それを耐えた、いや、耐えることしか出来なかったのであろう。人の命を預かっている限り、決して一人なんかで逃げることは出来ない。そう感じたのだろう。

今、自分がすべき事、しなければならぬ事を真っ先に行動する、その素晴らしさに、胸を打たれた。

医療器具や医薬品が原爆によって燃え、無くなってしまい、診てあげることしか出来なかったあの日から75年の時が経った現在、二〇二〇年も、医療の現場が自らをも犠牲にして第一線で戦ってくれている人達が世の中にたくさんいる。“新型コロナウイルス”をうつさせないため、家に帰られず、身体的にも、精神的にも、疲れが溜まった中で診療しなくてはならない人達がたくさんいる。しかも特効薬はもちろんのこと人工呼吸器すらも十分につけてあげられない。

「君は医者だろう。医者なら君が治療してくれ。」全てが燃え、無くなってしまわなかったら、特効薬があったなら、助けてあげられるのに。誰に言われなくても、いち早く皆を手当てしてあげたい。今も一九四五年のあの時も、医療の現場の第一線で働いてくれている私達のヒーローは一生懸命、患者のために尽くしてくれている。それは、今も昔も変わっていない。今の新型コロナウイルスは世界中で、何十万人という人が犠牲になり、世界中で戦っている、そう考えると現在の状況も一つの「世界大戦」とさえ言えるだろう。僕は戦争が完全に無くなり、また新型コロナウイルスも完全に終息し、そして、何より、未来のためにも、世界中の人々が、「世界平和」この文字を目指して欲しい。こう、願ってい

る。

そして僕には何ができるだろうか？僕は IT 関連の先端技術やエンジニアに興味がある。だから将来は、医療の現場の第一線で働く医師や看護師、そして患者さんの力になれるように先端技術を駆使した医療機器の開発に携われる会社に勤めたい。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

願いを込めた千羽づる

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 しもむら かのん 下村 佳暖

私は、「飛べ！千羽づる」を読みました。この物語は、二歳の時に広島で原子力爆弾の被害を受けた佐々木禎子さんが、十二年という短い時間を力強く生きた記録がもとになっています。

一九四五年八月六日八時十五分、広島に原爆が落とされました。そして、原爆はたくさんの命と笑顔を一瞬にして奪ってしまいました。その時、二歳の禎子さんは爆心地から一六二キロメートル離れた自宅にいました。家の二階の床が崩れて、一階に落ちてくるほどの被害でしたが、幸運なことに家族全員が大きなけがをすることもなく助かったのです。しかし、原爆が落ちたその日から十年が経った一九五五年、十二歳になった禎子さんに異変が起こり始めました。顔色が悪くなったり、リンパが腫れたりし始めました。禎子さんはこのとき白血病という血液の成分のひとつである白血球が異常に増える血の病気になっていたのです。あと三月、長くても一年ももたない命だと医者に言われました。

「原爆症」今では悪性リンパ性白血病ともいわれる重い病で、原爆の放射能によって血をつくる細胞が壊れてしまったことが原因でした。十年前に浴びた放射能が、禎子さんの体をむしばみ続けてきたのです。この一年前から、三人の子どもが原爆症で亡くなり、原爆の恐ろしさが再びよみがえってきたのです。その日から、禎子さんは広島日赤病院に入院しました。いつも笑顔で明るい禎子さんは、病院でも自分より小さい子と遊び、同じ部屋の大倉記代さんとも仲良くなり、元気に過ごしていました。しかし、白血球数は生きるための限界と言われる十万を超え、病状は少しずつ、確実に悪くなっていきました。そんなとき、看護婦さんが千羽づるを禎子さんのところへ持ってきたのです。つるを折れば病気が治るといふ看護婦さんの言葉を信じ、禎子さんは、自ら生きるために、つるを折ることを決心しました。それから禎子さんは大倉さんと一緒に、一つ一つに願いを込めるように、平和の象徴でもあるつるを熱心に折りました。つるが千五百羽程になったある日、禎子さんはとうとう危篤状態となってしまいました。それでも禎子さんは、みんなに見守られながら、最後の力を振り絞って生きようとししました。禎子さんは最後まで千羽づるをじっとみつめていましたが、やがて、その目が力を失い、禎子さんは亡くなってしまいました。

その後、禎子さんの友だちは団結の会をつくり、「原爆の子の像」を建てる運動を全国に広げ、禎子さんが亡くなってから三年後の昭和三十三年に、少女が折りづるを掲げる像が完成しました。

私はこの本を読んで、原爆の恐ろしさ、生きることの大切さ、そして平和とは何かについて考えることができました。

原子力爆弾、それは数えきれないほどの命と幸せを一瞬にして奪いました。どうしてそんなものをつくってしまったのでしょうか。どうしてそれを普通の人々が住んでいる街に落としたのでしょ。多くの人辛い思いをしたのに、どうして今も世界に原子力爆弾がいくつも存在するのでしょうか。原子力爆弾は、多くの人命と幸せを奪うものです。私はもうひとつの被爆地である長崎で、被爆者による講話を実際に聴き、家族や友人を失った人の辛さ、悲しさで胸が痛くなりました。自分や家族、友だちがそのような被害を受けることを考えるだけで胸がはちきれそうです。二度と禎子さんのような辛い思いをする人がいない世界になることを心から願っています。

そのような世界を創っていくために、私たちにできることは、この原爆の恐ろしさを未来に伝えていくこと。そして、過去を教科書に、過ちを繰り返さないことだと思います。広島にある「原爆の子の像」は子どもたちの願いから、原爆の悲惨さを伝えることよりも、子どもたちが平和な世界を望んでいることを強く世界に発信しています。平和な日本、そして、平和な世界がいつまでも続くことを願って、禎子さんがつるを折り続けたように、たとえ小さなことでも、丁寧に一つ一つ努力を重ねていきたいと思いました。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

未来の平和

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 三浦 梨央

私は、15歳のナガサキ原爆という本を選びました。選んだ理由は、著者の渡辺浩さんが原爆を体験した年齢が15歳で、自分と同年代だったので興味がわきました。

この本は、渡辺浩さんが一九四五年頃の長崎で体験した原爆を後世に伝えるために書かれた本です。

私がこの本で学んだこと。それは目を背けずにあるままの過去を知り、戦争と平和について自分の問題として真剣に考え、受けとめていかなければならないということです。原爆による影響は私にはかりしれないほどのもので、爆発の瞬間、数百万℃、数万気圧の火球とともに熱線と放射線がばらまかれたそうです。被爆体験者は次のように語っています。「一瞬の出来事だった。実に目を覆う惨状だった記憶のみ残り、青空の見える場所で黒こげの人骨が沢山あったことの記憶が強く残っている。」と。私はこのような悲惨な状況を知って、被爆が与えたものは今までの世界を一瞬にして変えてしまい、友達も家族も一瞬にして失ってしまう二度とあってはならないものだと思いました。

私が特に驚いた場面は「爆心地近くの貯水池で水泳中の二十数名が、即死し、うつ伏せで浮いていた。」というところです。もし、そこに自分がいたら。と考えると、私は本当に生きてて良いのだろうか。早く助けて。と考えることでしょうか。きっと私はそんな状況には耐えられないでしょうし自分のことに精一杯になるでしょう。ですから、十五歳だった渡辺浩さんが、生き抜いたことは本当に凄いことだと改めて感じました。

また、私がよく知らなかった放射線の影響についても、くわしく書かれていてとても悲しくなりました。文中には、「皮膚がはげ、身体からたれさがっている人、目の玉が飛び出した子供、といった致命的なダメージを受けた人たちを見て、恐怖に息がつまりました。」とあり、医者は何もすることが出来なかったそうです。放射線を受けた方は、その時受けた心の傷を例えるならば白血病であり、ガンであり、クロイドであると、被爆者の体験談に胸が痛められました。

次は、原爆の被害が少なかった人々の言葉について紹介します。原爆症を発生した人に「君が生きることが大切だ」「運命に耐えて生きろ」と激励し、最後に「今、過去のことをいってもしかたがない。どんなことにもくじけるな。」と言ったそうです。同じく、原爆を体験した人々がこれらのような言葉をかけたことに対して、私はカッコいいと思いました。その理由は、同じ原爆を体験していて大変な状況下にいるのに周りに勇気や希望を与えられることは簡単にできることではないと思ったからです。

私は、この本を通して自分の知らなかったことや新しく気づかされたことがたくさんありました。十五歳に起こった惨劇、十五歳が見た地獄をこれからも無駄にしてはいけないと思いました。一九四五年頃の幸せとは、生きるということだと思います。それは、現在も変わらないけれど、忘れている人々も多いと思います。なので、生きる喜びを忘れずに核兵器と平和について自分の考えをたくさんの人に伝えていきたいです。いつ、どこで、何が起きるかわからない「いま」を、大切に過ごしましょう。人と人が殺しあう戦争を地球からなくす力を持っているのは、二十一世紀を生き抜くわたしたちだけなのでありますから。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

過去をみつめて

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 岩城 妃奈^{いわき ひな}

今ここにいる人が、いつも話しているあの人が突然いなくなってしまうたら。そんな恐ろしく想像し難いことが、七十五年前この国で起きていた。

昨年十二月、宿泊研修で長崎市を訪問した。長崎は広島と並んで世界で唯一原子爆弾を投下された都市であり、ローマ教皇が核廃絶を訴えたのは記憶に新しい。その長崎で平和学習の一環として原爆資料館の見学と被爆者の講話、平和祈念像前でのセレモニーも行った。

原爆資料館で見た、折り重なって倒れている人々の様子、崩れ落ちた家屋の写真は、今もまだ脳裏に焼き付いているほど凄惨なものだった。生き残った被爆者の方の中には、「こんなに辛い思いをするのなら、いっそ死にたい」と思った方もいたそう。

このような活動をして、私は戦争の本当の恐ろしさをきっと知らない。そこで、ノンフィクションの『ガラスのうさぎ』という本を手にとった。

空襲によって母と二人の妹、機銃掃射によって父を亡くし、帰る家までも失った十二歳の少女、敏子の話だ。タイトルになっている「ガラスのうさぎ」は東京大空襲で焼けた自宅から見つかった、溶けたガラスの置物のことだ。ガラスが溶けるほどの熱が街中を覆う。想像するだけで息が苦しくなる。もし自分の家族がその中にいたら……。

家族を失い、それを悲しむ余裕もなく、ひたすら我慢の生活。亡くなった家族を風化させないために生き続けなければならない。しかし、肉親を失い「生きることが辛い」のも確かだ。そんな葛藤を十二歳で抱える敏子には終わりの見えない戦争は暗闇だっただろう。生きるために必死に生活する中で迎えた終戦後、日本中が少しずつ自由になっていくように、敏子もやっと少女らしさを取り戻すことができていた。

「この文面は、わたしにとって、まさに輝く太陽のようにまぶしく見えた」

これは戦争の放棄を宣言した、日本国憲法が施行される場面で敏子が、心から素直に出た言葉だと思う。おそらく敏子だけではなく、戦争を体験した全日本国民が同じ気持ちだっただろう。また、当時の国民がこの憲法九条で安堵したのかを考えると、私達はこれからも平和な社会を築いていくことが大切だと思う。

戦争によって人の人生は簡単に変えられてしまう。そしてそれは何十年経っても戻るものではなく、忘れてはいけないことだ。憲法改正の動きが高まっている中、戦争体験者の声を聞き、間違った方向に進むことのないよう、国民がよく判断しなければいけない。また、私達学生は、この国で戦争があった歴史を知り、風化しないよう学び続けていかなければならない。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

戦争がなくなる世界に

釧路市立幣舞中学校 2年 こばやし みずほ 小林 瑞歩

もし、あなたは、たった一つの出来事で、大切な人が亡くなったらどうしますか。それが、空襲だったら・・・。

私は「ガラスのうさぎ」を読みました。主人公の敏子は、縁故疎開で二宮に行くことになる。母と二人の妹は、東京大空襲にあい亡くなってしまふ。そんな中、父と再会する事が出来た。が、父も空襲で亡くなってしまった。

この本を読んで、一番心に残った場面は、敏子が埋葬許可書を取るところでした。敏子はすぐに役場に行き、埋葬許可書の手続きを取り、周りの人々の協力を得て、父の葬式を出す事が出来た。何もかも一人でやらなきゃならない事に、私はすごいと思いました。

私は、突然死した祖父がいます。最初、祖父が亡くなったと知ったとき、あまりにもびっくりして頭が真っ白になりました。葬式を準備する母達の横で、

「え、本当に死んだの？」

と母に何回も聞いていた自分。まだ、心の中では生きているかもしれないと思っていたからです。

葬式の火葬場で最後の祖父との別れの時、急に涙が出て止まりませんでした。

「なんで、もっとおじいちゃんと話さなかったんだろう。もっといろいろな思い出を作ってたかった。」

と私は心の中で泣きながら言いました。私は頑張って葬式を出そうとしている母達を見ているだけで、何もしなかった。そんな自分が情けなくて、悔しかったです。

しかし、敏子は父が亡くなったその現実を、すぐ受け入れて行動に移した。彼女の前向きな姿はとても誇らしいです。

この時代の子ども達は皆、敏子みたいに家族を失う人がとても多くいました。

それでも今、戦争をしている国があります。社会の授業で銃を持った、アフリカの少年を見たことがあります。その表情はにこにこした笑顔ではなく、真剣に他の国と戦っている表情でした。少年達を戦争で戦わせるなんて、私は悲しくなりました。今はコロナウイルスで一時的に戦争を中止している国があります。このまま終止になるといいのですが。

今年で戦争が終わってから七十五年が経ちます。年数が経ったから忘れても仕方ないじゃないなくて、年月が経った今でもしっかり、この戦争という歴史を知るべきです。

第3 3回平和図書読書感想文コンクール

佳作

原爆への思い

釧路市立音別中学校 2年 ^{かんの}菅野 ^{りおん}凜桜

今まで、原爆について、テレビや社会の授業で少しは聞く機会がありましたが、被爆した方々の話を聞くことはありませんでした。

私は、今回『ナガサキノート若手記者が聞く被爆者』を読ませて頂いて、戦争や原爆というのは、私の想像をはるかに超える大変おそろしいものだということを感じたのと、被爆者の方々はとても強いということを知ることが出来ました。

この本は、朝日長崎県内版に二〇〇八年八月十日から二〇〇九年五月十四日まで掲載された「ナガサキノート」が再構成されたものです。「ナガサキノート」の企画で取材した被爆者の方々の原爆による被害や今も続く苦しみや思いが綴られていました。

取材をうけた一人の小幡悦子さんは、十二歳の頃に一九四五年八月九日の原爆投下により、白く細かった右足が、くの字に曲がってしまいました。このことにより、ズボンやあこがれていたハイヒールを履くことが出来なくなりました。さらに歩くことが困難になり車いす生活となってしまいました。記者の人達は、小幡さんに足の写真を撮らせて欲しいと頼むと「この足が原爆だから……。私が伝えられるのは、足だけだからね。」と言い撮らせてくれたそうです。この言葉を読み、小幡さんは強い人だと思いました。もし、自分の足が、くの字に曲がってしまったのなら、私は誰にも見せたくないし、写真も撮られたくないと思います。原爆の苦しみを伝えたいという小幡さんの思いが、すぐく伝わってきました。

この本には、小幡悦子さん以外にも、原爆によって家族を失ってしまった方、一人芝居をして自身の体験を孫世代に伝える方、原爆を落とされた瞬間を「永遠の十秒」と記憶し被爆者として「平和は当たり前ではない。」と私たちの世代に伝えて下さる方など、たくさんの方が語っています。そんな方々の思いが込められている一冊であると思いました。

私は、原爆というのは、大変おそろしく、一気にたくさんの方の命を奪ってしまうという、あつてはいけないものだと思います。今、私たちが、こうして、好きな事を出来るのは当たり前ではなく、幸せな環境があったり、平和だからこそ出来ることだと思います。亡くなりたくなくても、原爆で亡くなってしまった方の分まで、生きるためにも、命を大切にし、平和で幸せであるということにも感謝をしようと思いました。また、被爆した方々が、原爆について、語って伝えてくれていることを大切に、これから色々な本を読み、語り継ぐことがあったら、少しでも語り継ぐことが出来たらいいなと思います。なにより、原爆、その前に戦争が二度とこの世界で、起こらず平和が続くことを願っています。

第19回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

時代とともに移りゆく平和

北海道釧路湖陵高等学校 3年 ^{ひわたり} 樋渡 ^{わかな} 羽奏

平和とはなんだ。小学生低学年の頃からこの問いの答えを探し求めてきた。その過程で私が出会った本や人、訪れた被爆地の広島と長崎は、私の平和に対する思いを大きく変えた。戦争体験談を聞いたり、被爆したものを目の当たりにし、様々な視点で思いを巡らせてきたつもりだ。

さて、現代の社会は平和といえるだろうか。核の廃絶が進んでいないことはさることながら、内戦やテロの武力による危険にさらされている人もいる。飢えに苦しんでいる人もいる。加えて、行き届いた十分な医療や安全な生活環境が整備されず、命を落とす人さえいるのが現状だ。平和は何らかの脅威や苦しみが完全に排除されて初めて成立するものではないのか。

今年の春、命の大切さを痛感させられた。新型コロナウイルスの流行のことである。日本ではまだ感染が確認されていなかったころ、他国で流行しているという報道に接しても、「対岸の火事」のようにしか思わなかった人がほとんどだった。「自分だけは大丈夫」という考えが多くの人命を奪った。協調の欠如から生まれた悲劇だろう。

一方で「共助」の精神がもたらした人間愛を新聞の投書で目にした。「バスに乗車していると、その中でただ一人、マスクを着けていない高齢の女性がいた。そこで自分が持っていた三枚のマスクをあげたところその女性は涙を流して喜んでいた。」マスク不足が深刻化していたご時世で、見ず知らずの人に譲るには大変な「勇気」を必要としたと思う。それでも自分の身に対する感染の懸念よりも善意が勝ったのだろう。心の強さとその勇気に震撼した。人間の神髄に触れたような気がした。それと同時に、本来動物や人間には、助け合おうとする本能が備わっている。だから、手を差し伸べられた瞬間、「頑張ろう」という意欲が沸き、明日への活力にもつながっていくとも思った。このスパイラルこそが、社会的な共助の輪を広げていく一つのルートなのではないだろうか。

このような篤行も少なからずある。だが一方で核の開発は今も尚進んでいる。いくら声を上げて開発が中止される確率はゼロに等しいということが悲しくてならない。核開発推進派が唱える核抑止論があることはわかっている。しかし、本当にこの理論は通用するのだろうか。私はしないと思う。自国の安全や国益が危ぶまれたとき、皆、平常心を保つことができなくなると考えるからだ。取り決め通りに事を進められないことも十分にある。貿易摩擦や外交上の意見の相違により、その関係に亀裂が入ることも珍しくはない。歩み寄ったかと思えば急にけん制し合う。核開発すら、国同士での競争化が激化している側面

も否めない。核兵器がなくならない限り、核戦争の可能性は十二分にあると考える。戦争の最大の抑止力は核の保有ではなく、核の完全なる廃絶だ。

今からほんの七十五年前、日本に四日間で二度も原爆が投下され、何十万という尊い命が失われたという過去は覆すことができない。いくら愚かな行為を恥じてもその事実は変えられない。失われた命も戻ってこない。現代日本のように「戦争」という同じ過ちを後悔するような未来は望まない。むろん、一般国民に核開発を阻止することができるような力もない。しかし、こうして今、生命を授けられている私たちが、あの悲惨な戦禍を見聞き、語り継いでいくことで、世論の大半を反戦争派へと導いていくことができるかもしれない。

しかし、現実には戦争体験者の減少や高齢化により、当時の生の声を聞く機会が失われつつある。より一層、与えられる機会を可能な限り無駄にせぬ意識を持つ必要がある。その際には、語り部たちは常に戦争を想起する度にその心を痛めていることも胸に止めておかななくてはならない。自分たちが味わった血の滲むような辛い思いが脳裏をよぎり、その振動さえもが聞き手に伝わるほどだったからだ。今を生きる私たちには同じ思いをさせたくはない、という強い意思があるからこそ、伝承してくださっている。その想いに報いるためにも、私たちは一つ一つの言葉を深く受け止め、心に刻み、未来へそのバトンを繋いでいかなくてはならない。それは、我々に課された責務でもある。

私にとって、釧路市が主催するこのコンクールは、戦争の忌まわしさと恒久平和の尊さ、そして、それを語り継ぐ義務を考える一つのきっかけだった。残念ながら応募の機会は今年で最後となってしまった。しかし、世界中の人が「平和な世の中だ」と思い続けられることの重要性はいくら歳を重ねても心に止めておきたいと考えている。むしろ学びを深めていきたい。たくさんの人たちによって日本はもちろん、世界にも未来へ向けてこのバトンが受け継がれていくことを切に願っていく。

未来の明暗を分けるのは私たちだからだ。

第19回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

今の日本と平和

北海道釧路北陽高等学校 2年 仲谷 凜彩

「今の日本は平和ですか？」そう聞かれた時、あなたはどうか答えますか？“平和”に対しての価値観は人それぞれあると思います。でも、私は、この問いに対してははっきり「はい」と答えることはできません。

なぜなら、確かに日本では戦争も起きていません。そして毎日食べる物に困っている人や命の危機にさらされている人もほとんどいません。ここだけを見ると、一見平和だと思ってしまうかもしれません。しかし、学校や会社でのいじめ、まだ幼く抵抗のできない子どもへの虐待、インターネットが普及したことにより、匿名でなんでも書き込めてしまうSNSでの誹謗中傷など、近年このような問題が増えてきているのではないのでしょうか。私はこのような点から、戦争が起きていないだけが“平和”なのかと疑問に思います。

二〇一六九。突然ですが、あなたはこの数字が何の数字かわかりますか？これは、令和元年の自殺者数です。前年より六七一人減り、平成二十二年以降から、十年連続減少しているそうです。私はこの数字を見てすごく驚き、それと同時に悲しい気持ちでいっぱいになりました。一日に約五十五人の方の命が自殺によって失われている日本の現状をこの先、どう受け止めていけば良いのか私にはわかりませんでした。

自殺の原因や背景では、様々な要因があると思いますが、“言葉”というのもその要因の一つだと思います。言葉は時に、大きな力をくれますが、その一方で人を傷つける刃物にもなります。この言葉という刃物がもたらす対人関係での小さな戦争が積み重なり、どんどん膨れ上がっていき、やがて国同士での戦争に発展していくのではないのかと思います。今、言ったことは大げさかもしれませんが、言葉にはそのくらいの力があると私は思っています。だからこそ、人の心を温めるために言葉を使いたいです。

そして、私が考えるもう一つの大きな要因が SOS の発見が遅れてしまうことです。誰かに相談できない、相談しても「頑張り」といわれるだけで解決へ繋がらないという事が多々あると思います。SOS にいちはやく気づき周囲が支えていける人間関係の確立がこの先とても重要になっていくと思います。

最後に、紛争の絶えない国から見ると、私たちの国日本は、平和で豊かな国といえるでしょう。しかし、今回私が取り上げた「自殺」というのはこの先、向き合っていかなければならない大きな課題で、今もどこかで起きてしまっているかもしれません。私たちは一人で生きている訳ではありません。誰かに支えてもらいながら、そして、支えながら長く

て短い人生を歩んでいます。今、生きていられるだけで幸せで“当たり前ではないこと”をこの作文を書いている上で学びました。

この先、自ら命を投げ出してしまう人が少しでも減り、平等に明るい明日が来る、そんな国になっていってほしいです。

第19回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

スポーツと平和

北海道釧路明輝高等学校 1年 伊藤^{いとう} 麻琴^{まこと}

平和とは何だろう。そう考えてみた時、最初に思いついたのは、世界中の人々が皆、普通の生活を送ることができることだと思った。でも、世界中では、数々の場所で戦争や紛争が起きており、平和な世界ではないというのが現実だ。どうすれば平和な社会になるのだろう。そう考えた時、私はスポーツがとても重要なものであると思った。

スポーツの祭典であるオリンピックは、フランスのクーベルタンによって、1896年に第一回大会がアテネで開催された。オリンピックは、平和の祭典と呼ばれている。クーベルタンはスポーツを通じて平和な世界の実現に寄与することをオリンピックの目的に捧げた。また、勝敗だけではなく、ルールを遵守し、正々堂々と全力を尽くすというフェアプレー精神がオリンピックで重視されている。

私はアイスホッケーをやっている。そして、2月にスイスのローザンヌで行われたユースオリンピックに参加した。そこで感じたことがある。それは、スポーツは国と国を結ぶということだ。4ヵ国と試合し日本は全勝で優勝することができた。その時、各国の観客達は、試合後に日本の勝利を称え、スタンディングオベーションをしてくれた。そして、特に強い印象をうけたのは、自国であるスイスの観客である。決勝でのスウェーデン戦では自国であるスイスがいないにも関わらず、スイスの観客は日本を応援し、得点した時、優勝が決定した時には自国のように喜んでくれていた。そのスイス人の行動に、喜びと感謝の気持ちを強く感じスイスがとても好きになった。

日本のスポーツではあまり見ないスタンディングオベーション。これは、感動を表現する最大の賛辞である。私はこれをユースオリンピックで初めて体験し、感動と試合への達成感を感じた。これは、観客と選手を一つとし、勝ち負けを関係なくすべての人がよい思いをする素晴らしいものだと思った。また、それは国と国を結ぶものでもあると思った。

このことから、私は改めてスポーツは人々を一つにするととても良いものであると感じた。人と人を結び、国と国を結ぶことができるスポーツは、平和な社会を作るのにとても重要な役割を持っていると思う。私もスポーツをするにあたって、相手への感謝や尊敬の気持ちを忘れず、より一層努力していこうと思った。

第19回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

尊き平和へ

北海道釧路明輝高等学校 2年 山本 ^{やまもと} ^{あい} 愛

真夏の日差しが照る雲一つない空は一瞬でこの雲へと変貌し、人々から平和を奪った。あの忘れられない原爆から七十五回目の夏、かつては荒れ果て焦土した街も今では復興し世界平和に向けての祈りの場となっている。昭和から平成、令和へと新時代が築かれていく中、去年の被爆者は初めて十五万人を下回る形となった。それに反し、死亡が確認された名簿が慰霊碑に奉納された数は五〇六八名と無条件に増えていく。この二つの数字に重みを感じつつ平和へと繋がる未来に夢と希望を持つ自分がいることは確かだ。

令和という新時代が築かれていく中、人々が待ち望んでいた二〇二〇が来た。今年が「核廃絶の期限の年」であった。しかし、核兵器を巡る世界の情勢は未だ緊迫した状態が続いており、期限の年に達成されることは無かった。核保有国へ働きかけ世界が一つとなり踏み出す力や決意が無い限り、核は人々を脅かせ続けることだろう。この「核兵器」についての話題に触れる度、“この世界は不平等だ”とつくづく思う。平和を願う多くの人の思いが、ほんの少しの武力に負けてしまうからだ。その瞬間、平和を目指す道は格段に遠くなり「支配」や「占領」といった荒々しい言葉が目立ち始める地球へと早変わりする。一歩間違えば他人の未来を奪うことになるのだ。

他人の未来を奪うものは武力とは限らない。未だ世界各地で猛威を振るい続けている“ウイルス”も例外ではない。二〇二〇年、突如姿を現し始めた新型コロナウイルスは瞬く間に感染力を拡大させパンデミックを起こした。私達は最大限の努力を行い専門家や医療従事者は今まで培ってきた技術で見えない敵へと向かっている。だが見えないという点で有利に立つウイルスに人類は刃向かうことすら出来ず、立ちつくしている。その象徴がロックダウンだ。「防止」という名目でしか抑えることが出来ない敵は、私達が今だかつて経験したことのない混乱を巻き起こしている。

現代の日本は、大量の情報が瞬時に入手出来る、いわゆる情報化社会である。その為あらゆる意見・情報がネット上で攪乱し正しい行動を見極めることが非常に難しい。意見のすれ違いで争いが起きてしまうこともよくあることだ。この際に考えてみて欲しい。平和とはなにか。本当の幸せとはなにか。情報に流されることは簡単だが正しい情報を自分自身で見極めそれに見合った行動や選択を取って欲しい。それが「本当の幸せ」に繋がる道だと私は信じている。

希望に満ち溢れた新しい時代を築いていくという意味で名付けられた「令和」が今後を

どう彩るのか楽しみでならない。

この危機を乗り越えまた皆で笑い合える日を信じて。

第19回平和の主張コンクール
佳作

当たり前は奇跡

北海道釧路明輝高等学校 3年 岩崎 結衣

私には家族がいます。大切な大切な存在があります。

これを読むみなさんは今、これからも幸せに過ごしていますか。きっと誰にも分からない質問だと思います。

では、みなさんの家族は生きていますか。笑顔で元気いっぱいですか。この質問は人それぞれです。中には障がいがあったり事故があったりと、沢山あります。

私の家族は全員が毎日元気に暮らしています。ですが、私の母は筋ジストロフィーという筋肉がなくなっていってしまう病気を患っています。私の母は進行が遅く、同じ病気の人とは症状が異なりますが、自分でできることのほうが少ないです。

私が幼稚園の頃、母は朝から私のために可愛いお弁当を作り、私を車で幼稚園まで送り届け、帰りも車で迎えに来てくれました。

私が小学二年生の時、母は一人ではみんなのように歩けなくなりました。つまり、誰かの助けが必要になったのです。

それから母は、座りっぱなしになりました。考えてみてください。今は当たり前のことを。

私は、母とおにゴッコがしたい。二人でお出かけがしたい。買い物をしに行きたい。二人で並んで歩きたい。

あなたからすれば、そんな小さなことがしたいのかと思うかもしれませんが、私はあなたが母親と共にスーパーを歩いているのが、とても羨ましいのです。

みなさんは、学生時代反抗期はありましたか。親にひどいことを言ったり、したりしてしまったことはありますか。良いことだと思います。自分の意志を伝えられるようになった、「甘え」を必要としなくなったと考えられるからです。

大切なのはそのあとです。親孝行が一番の解決策です。自分なりの最大のありがとうを伝えることができます。

これらのことを深く考えたことはありますか。私はいつも考えます。どうやって伝えようかと。

家族がいることが当たり前になっていませんか。毎朝お弁当を作ってくれたり、ご飯を作ってくれたり、家事をしてくれて、仕事を頑張ってくれて、いつだって守ってくれるのは家族です。いついなくなってしまうかなんて、誰にも分かりません。当たり前ではないことを忘れないでください。家族を心から大切にしてください。

私の母は、いつ死んでしまうか、分かりません。毎日毎秒を大切に大切に生きるのです。

私が思う平和は、私達、人が、他人でも隣人でも家族でも、どんな人をも愛して生きら

れる日々があることだと思います。

例えば、私が今まで言ってきた家族です。とても単純なことで、家族を愛せばいいのです。ほとんどの人が私は家族を愛していると言うでしょう。でも、それは本当ですか。きっとなにかを当たり前と思っているものがあるはずです。一度でいいので今の当たり前が本当の幸せだということを考え直してみてください。感謝を伝えたくなくなるはずです。

他にも、いつでも側にいてくれる友人達。友人は一生の宝物です。いつまでも愛してください、心からです。それに、お隣の人、いつも挨拶をするだけかもしれません。それでも愛すのです。

私達が世界の平和のためにできることは数多くあると思います。ですが私がみなさんの心を動かすためには、この紙だけでは足りません。私にできることは、あなたが過ごしている今が当たり前ではなく奇跡だということを伝えることです。

あなたがどんな家庭で育って、どんな友人がいて、どこに住んでいるのか、私には分かりません。ですがその知らないあなたに私は伝えることができます。

どうか身近にいる人を大切にしてください。沢山愛してあげてください。あなたのその思いやりと優しさが少しでも「平和」に繋がると信じています。

私は「平和」のために、家族との限られた時間を大切にし、友人との深い時間を自分だけの宝物にし、毎日「ありがとう」と思うのです。それが私にできる「平和」への第一歩なのだと思います。

第19回平和の主張コンクール
佳作

戦後の日本はどこへ？

北海道釧路北陽高等学校 2年 白幡^{しらはた}虹斗^{にじと}

みなさんは戦争の恐ろしさをちゃんと理解していますか？第二次世界大戦中、日本は誤った考えで世界の国々を敵に回し、国民をも危険な地へと運んでしまったのです。そしてたくさんの損害を背負ってしまい、日本は降伏しました。しかし、そこから日本は這い上がり、「平和」を願う素晴らしい国になりました。しかし、今の日本はどうでしょう？

今の日本の政府は平和の柱でもあった、平和主義を変えようとしています。その内容を簡潔にいうと、自衛隊が武器をもって戦争をしに出動できるようにするという内容です。みなさんはこの憲法改正に賛同できますか？私は反対です。なぜ平和を愛している日本がまた戦争に参加しなければいけないのですか？なぜ国民をまた危険な状態に政府はするのですか？なぜ日本人が人殺しをしなければいけないのですか？はっきりいって今の日本政府は戦争への認識が甘いようにしか私は見えません。自国の平和の為といっても、戦争ができる国にするのはいきすぎた考えだと思います。

私は今が戦争について正しく理解することが大事な時期だと思っています。戦争の恐ろしさを知っている日本人も高齢化が進んできています。それに伴って、若い人は戦争への知識が足りないという人がほとんどだと思っています。私も実際、戦争について全然わかりません。だから、そんな人達が増えている今だからこそ、もっと戦争の知識を得る為の講演や場所、話し合いを増やしていき、日本人は戦争を嫌い、こよなく平和を愛せる、そんな国になってほしいと思います。

そして、私のおばあちゃんは口うるさく言っている言葉があります。それは「孫としゃべれていると、生きてて良かったと毎回感じているんだ」と。私のおばあちゃんも戦時中の日本で生きていた一人です。そして、戦争のせいで父を亡くしてしまい、食べ物もろくに食べられなかったと話していました。他にも危険な時にはふすまの中で姉妹でおびえながらかくれていて、いつ死んでもいいように覚悟をしていたなどといった戦時中の話をたまにしてくれることがあります。私は毎回聞くたびに、言葉にできない感情に包まれ、今、平和に生きられることに感謝しないと、といった思いになります。私はこの話を聞いて思ったことが日本が戦争をできる国になってほしくないという考えになれたと思うのでおばあちゃんの話聞いて良かったなと思います。そして、私のこの思いをもっといろいろな若い世代に伝わってほしいと思っています。そして、戦争に参加するという事は、誰一人として良い事がないという考えになってくれれば今の日本政府が変えようとしている平和主義の憲法改正に歯止めをかけれると思うので、戦争を知らない若い世代に講演などといった活動をもっと活発にしてくれれば平和を愛せる日本人になると思います。

あともう少したてば日本が戦争ができる国になるかの分岐点が来ます。今、日本政府が

しようとしている平和主義の憲法改正は戦後学んだ日本の考えをなくしてまた戦争をくり返すことにもなりかねないこの憲法改正に私は反対です。

第19回平和の主張コンクール
佳作

戦争から学ぶこと

北海道釧路明輝高等学校 2年 本間 莉望

平和とは、戦争や暴力で社会が乱れていない状態のことである。今では世界で最も平和な国ランキングの上位に入る日本だが、七十五年前もそうであったと言えるのだろうか。

今から八十一年前の一九三九年九月一日に第二次世界大戦が始まり、一九四五年、広島に原子爆弾が投下されて、当時の広島の人口三十五万人うち十六万六千人が死亡した。

なぜ人々は戦争をしたがるのか。今でも、アフガニスタンやイラクなどの地域で紛争や内戦が起こっている。

私は戦争を経験したことはないし、戦争経験者から実際に話を聞いたこともないので、本当の恐ろしさを知らないし同世代の多くの人も知らないだろう。終戦七十年記念のテレビ番組が低視聴率だったということを知り、時代が進むと共に戦争経験者は高齢になるし、若者の戦争に対する興味が薄れつつあるということになる。このままでは十年後、二十年後になった時には戦争の記憶はほとんどないのではないだろうか。

しかし、今の私達では後世に戦争のことを伝えるのは難しい。では、経験者が映画やドラマ、本などを通じて伝える他ない。

戦争をしていた頃の日本は、自分の意見を言うことができなかった。私はそれは、人権を無視することだと思う。自分の家族が戦争に行ってしまうのに、心から喜ぶ人や、自分が死んでしまうかもしれないのに、嬉しい人なんて、絶対にいない。

今、私達は自分の意見を言う事ができる。だから私は、戦争は絶対に反対である。大切な人の命が奪われてしまう戦争は、まったく意味のないことだから。誰にも生きる権利を奪うことはできないはずなのに、戦争は簡単に奪ってしまう。悲しい、辛い、いたい、怒り、憎しみなどの感情に国の違いは、関係ない。だから、例え国が違っても同じ人間同士が殺し合いをすることは、理解できない。

日本は戦争しないことを誓い、今は平和である。私達は、食べ物、着る物に困ったことはない。それが当たり前の日である。しかし、当たり前でない人達も未だにいるだろう。私達は身近な出来事でなければ、無関心なのかもしれない。でももし、自分の身近な出来事になってしまったらどうだろうか。今までの豊かな生活が奪われたらどうだろうか。誰もが無関心では、いられなくなるだろう。私は戦争を許せないし、憎むだろう。

私が思う平和な世界とは、戦争がなく、世界中の人が笑顔で幸せに暮らせることだ。そのためには、戦争がどんなに悲惨なもので、悲しみや憎しみしか生まないと知ること、一つしかない命の尊さを改めて考え直すこと、世界中の人々が戦争反対を呼びかけることが大事だと思う。

これからは、色々な事を学びながら命を大切に生きていきたい。

第19回平和の主張コンクール
佳作

平らに和む

北海道釧路明輝高等学校 1年 高坂 美来

「平和」とは、何か？ どのような状態であることが「平和」なのか？ 私は、まずそこから考えてみた。「平和」と辞書で検索すると、一つ目に、“戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること”と書かれていた。今日まで日本が関わった戦争は、第二次世界大戦以来ないだろう。そのため、戦争というものをあまり実感できてない人も、そう少なくはないでしょう。私も、その一人である。しかし、アフリカ域などでは、地域紛争が現在も発生しており、難民が増えてくばかりである。その地域紛争の主な原因は二つある。その一つは、宗教の違いである。かつて、アフリカは、ヨーロッパ諸国の植民地とされており、その際民族や部族の居住地域を無視して国境線が引かれたことで、民族が分断されたり、異なる民族どうしが同じ国の国民とされたりしたことが地域紛争が発生する原因の一つだと考えられる。

二つ目は、資源をめぐる地域紛争である。アフリカには世界各国から注目されるほど、石油やレアメタルなどの資源が豊富にあるため、その資源を取り合って紛争が長引いているのである。これらの主な二つの原因を解決し、世の中から紛争が消え、世界中のみんなが平和に暮らせるようになるにはどうすればいいのだろうか。この問題は、今すぐに解決できるものではないことはわかっている。なぜなら、この問題は世界中の人々の協力なしでは解決できないと思うからだ。しかし、世界中の国の人々が協力して、一人一人が他人、他国の人のことまで考えられるような広い心を持つことができれば、解決できる可能性は0ではないと私は思う。

私は、世界全体で紛争を無くしていくために、一人一人、各国ができることをいくつか考えてみた。その一つは、まず、アフリカの紛争地域の現状を知ることである。現在、世界の約9人に1人が、飢えている状態にあり、食糧不足のために栄養失調や栄養不足になっている人が、およそ8億人に上るとみられている。そのうちの98%は発展途上国に住む人々であることが現状である。また、UNHCR（世界各地にいる難民の保護と支援を行う国連の機関）の支援対象者は、2014年末には世界中で5490万人にも及び、そのうちの1390万人が難民である。そのうち、今、尚、学校に通えていない子どもたちは約370万人もいるのである。日本では、ほとんどの子どもたちが学校に通えているため、学校に通えていることをあたりまえだと思っている子どももそう少なくはないだろう。しかし、世界全体として見てみると、学校に通えるということはごくあたりまえなことではない。なぜなら、危険すぎて通学できなかつたり、家事や仕事をしなくてはいけなかつたりする難民の子供たちがいるからである。学校に通うことは、難民の子どもたちにとって「とても幸運」なことになっているのである。

二つ目は、核兵器などの武器を無くすこと、簡単に手に入らないようにすることだ。現在でも核兵器不拡散条約（NPT）に加わらない国もあり、また、常任理事国が多く保有していたりと、核兵器に対する不安がおさまらない状態である。他にも、武器が容易に入手できるため、子供が兵士となり、戦争に立つことも珍しくはないのが現状である。こういった状況を無くしていくためには、各国の核兵器などの武器に対する概念を変えていく必要があると思う。そのためにも、日本の非核三原則をもっと世界へ発信していくべきだと思う。

三つ目は食糧・水・エネルギーについてである。人口の急増によって生じる最も深刻な問題である食糧不足は、これ以上飢餓に苦しむ人を増やさず救うためにもすぐに解決しなければいけないことだと思う。現在の世界には、全人口を支えるだけの食料が存在するといわれているが、かたよった配分のされ方に問題がある。先進国では、毎日膨大な食べ残しが廃棄されているながら、同時に、途上国では、多くの人々が飢餓に苦しんでいるのである。この問題を解決するためにも、残さず食べることはもちろん、食べきれない量の食糧の購入など、世界中のみんなに平等に食糧が配分される仕組みを確立すべきだと思う。また、水不足やエネルギー不足によって国際問題が発生する前に、いち早く“持続可能な発展”を目指す取り組みを定着させるべきだとも思う。

私は、この三つのことを実行していくことで、時間はかかるかもしれないが、少しでも平和な世の中を作っていくことができると思う。しかし、災害や現在感染拡大している新型コロナウイルスの影響など、人の手で直接止めることのできない問題もあるが、そういった状況を世界全体で協力することで解決に導ける平和な世の中になればいいと思う。

第19回平和の主張コンクール
佳作

平和とは？

北海道釧路北陽高等学校 2年 田中^{たなか} 有紗^{ありさ}

私は「平和」について色々な考えを持つ人々がいて、何が本当の「平和」なのかよくわかりません。なので平和とはどのようなことを指すのか、どうしたら平和に近づくのかを考えたいと思います。

まず初めに、平和とは何なのか？戦争や紛争がなく貧困、虐待、ハラスメントなどの大小かかわらず多種多様な「苦しみ」がなくなった世界のことを指すのでしょうか？それとも、そのような苦しみの中でも個人が「幸せだ」「満足している」と思えていれば平和なのでしょう？口では何とも思っていないと言っても人間の心はとても傷つきやすく、その傷から新たな恨みや憎しみが生まれてしまいます。人の気持ちを他のだれかが制御することなどはできないので気持ちの面での平和は無理なのではないかと思います。

では、戦争や紛争といった大きなことがらについてはどうでしょうか？はるか昔からそのような戦や争いはおこっており、人間に限らずその他の動物や植物でさえも自分たちの食べ物や住み家、時にはそれ以外の私には知りえない理由で戦っています。どのような生き物でも住める場所や食べることができるものは限られています。戦争や紛争はそういった限られたものを手に入れたい思いからおこってしまっているものが多いのではないかと感じます。例えばその限られたものをすべて均等に分けることができたとします。それでも本当の始めから均等でない限り、だれかが何かを失ったうえに成り立っているのです。そこからまた争いが生まれることになるかもしれません。

それならば、少し身近な虐待やハラスメントなどについて考えてみます。身近な苦しみでさえ私達の生きる世界では無くなることはなく、ましてや増加傾向にあるものもあります。周りでおきていても気づくことさえできず、助けを求めても相手にされなかったり、今のままでは決してなくなることはないと思います。なくならないのであればまず減らすことが大切です。

こういった苦しみを減らすために私達にできることは少ししかないのかもしれませんが。戦争や紛争を止めることは何の力もない私には無理です。ですが気づくことはできるかもしれません。身近な苦しみに気がつくことが私達に一番必要なことなのではないかと私は思います。気づいたからって自分には何もできない、助けられないと思う人もいるでしょう。でも知っているか知らないかでは大きな差があると思います。もし苦しみによって傷ついたり命を絶とうとしたりする人を少しでも減らしたいと思うのなら、自分の周りをもっと目を凝らして見るべきです。実際に自分は虐待やハラスメントなど受けていないとしても気づかないだけで周りにはそのようなことであふれているのかもしれません。

最近のニュースなどではよく SNS による誹謗中傷をうけ自殺という悲しい決断をした人、

たった一枚の写真から身元を特定され、おそろしい経験をした人などインターネットが発達したためにおこった苦しみが報道されています。人間の技術が進化することによって世界は豊かになっていくと同時に平和とは遠ざかりつつあるのかなとも感じます。戦が絶えなかった時代と比べると今はとても平和です。ですが新しい種類の苦しみが生まれはじめていることにも目を向けなければなりません。**SNS** という場は人間が皆いつも心の奥に秘めている暗い気持ちをぶつけることができるところです。これから大きく話題となっていくのは戦争ではなく **SNS** などの最近の技術だと思います。その **SNS** をどのように活用していくかで平和の考え方も変わっていくのだろうと感じました。

最後に、平和とは結局どんなことを指し、どうしたら平和に近づくのかまとめます。私自身は平和はどんなものなのか最後までよくわかりませんでした。ですが、人間の気持ちと争いは深く関係しており、それを全てなくすことは難しいとわかりました。そして平和な世界へと近づくためには「気付く」ことが大切だという考えにたどり着きました。今まで気付かれず、知られなかった苦しみ、一つでも多くなくなり、私達の世界がそれぞれが考える多様な「平和」へと近づいていくことを願います。

「平和」とはどんなことを指すのかはだれかが決めることではなく、みんなが一人一人違う考えを持っていると思います。それでも平和についての自分の持つ意見、考えを示し話し合ったり交流することはこれからも続けていくべき大切なことだと思いました。

第19回平和の主張コンクール
佳作

平和で過ごすために

北海道釧路北陽高等学校 2年 ^{もとかわ} ^{りく} 本川 琳久

「平和」と言われたら何を思い浮かべるだろうか。平和＝戦争のない世の中だと私は思う。ただ今、世界中が平和であるかと言われると私は平和ではないと思う。ここ最近でも中東で空爆により多く死傷者が出たり、アフリカでも内戦により多くの犠牲者が出たり、戦争にはなっていないなくても大きな戦争がいつ起きてもおかしくない状態にもなっている。私たち日本人も巻き込まれると思っ**て**もいる。数年前、北朝鮮によるミサイル発射により、朝、Jアラートが鳴り響いたことがあった。私自身、戦争は経験したことはない。だが、あの日の朝は本当に戦争が起きるのではないのかという恐怖を感じた。この時、私たちの身近まで戦争という恐怖が近づいていると思った。私はこのような経験をして改めて戦争に対して危機感を持ちはじめた。

世界を見てみると各地で戦争以外にもテロという恐ろしいことも起きている。このテロについては毎年どこかの国で必ず起きている。そして時には多くの人の命までうばわれている。いつも通り過ごしていたら急に無差別に殺されているこの状態に私は疑問である。何もしていない人々が殺されるのはおかしい。どんな理由があろうとなかろうと人の命をうばってまでやることはこの世には存在するはずがない。このような状態が続いていたら私たちもいつ誰に殺されるかわからないという恐怖と危機感を持って過ごさなければならなくなる。でもそんなことを思っ**て**日々を過ごしたいと思いたくはない。そのような「恐怖」や「危機感」を持って人々が過ごしているのであるならこの世の中は「平和」であるとは言えないだろう。

では平和でいるためにはどのようにしていくべきか。一番の解決方法は私にはわからないが、まず一つとして武力や核兵器を持たないことだと思う。武力を持っている以上は平和な世の中に近づくことはできない。まずは世界から武力を持たない方向に進むべきだと思う。もう一つは戦争とは何か十分知ることだと思う。日本は戦後七十五年となり戦争を知る世代、経験した人々が減って**い**っている。そして戦争を知らない、経験したことの**な**い人々が増えている。戦争とは何かを知らない人は知るべきだと思う。日本は七十五年前の戦争で痛い経験をした。その経験を後世の人々にさせたくない、したくないのであれば戦争についてよく知るべきだと思う。はっきり言っ**て**戦争はだめだ。誰も良い思いなどしない。たとえ戦争に勝っても人を大量に殺してしまったという後悔をずっと抱えて生きていくことになるし、家族や友人などを失った人も悲しみを抱えて生きていくことになる。戦争になればいつもやっていたことが急にできなくなる。日常というものすら失うことになる。そんなことにはなりたくはない。武力によって物事を解決するのではなく、言葉によって物事を解決していくことがこれからの世の中に求めるべきだと思う。人間は言葉を

使うことができる。なら言葉を使って誰も死ぬことなく物事を解決していくべきだ。

今の世の中、私は平和から少しずつ遠くなっていることを実感している。少しでも平和な世の中にするためには、世界中の人々で戦争をなくすことだ。平和な世の中は誰か一人によってつくられるのではなくみんなでつくるもの。そして少しでも早くみんな安心して暮らせる平和な日々が来ることを祈る。

第19回平和の主張コンクール
佳作

私にできること

北海道釧路明輝高等学校 2年 高橋 亜美

六時に起きて朝ご飯を食べ母に「いってきます」と告げ学校に行く。部活動や友達と遊んで家に帰る。家に帰るとそこには、家族が当然のようにいて温かいご飯とお風呂がありフカフカのベッドに入って朝をむかえる。何の変哲もない私の一日だ。

だが、この一日を突然奪われた人たちがいたことを私は知った。

私は中学生のころ宿泊研修で長崎に行った。そこで、被爆者の方からお話を聞く機会があった。この記憶は高校生になった今でも鮮明に覚えている。

一九四五年八月九日。この日は朝から青空が広がる暑い夏の日だったという。学校に行く者、仕事に行く者、家にいる者。みんないつも通りの生活をおくっていた。すると「ピカッ」と空が光り、その瞬間に爆風が吹き込み、あっちこちと吹き飛ばされ、気が付くと黒焦げになっている人、眼球が飛び出ている人、火傷して二、三倍に膨れ上がっている人たちがたくさんいた。川の中にも遺体が浮いており一八、九くらいの女性が脇腹から飛び出た腸を引っ張って亡くなっていた。今まであった家が一軒もなくなり、死体と瓦礫の山になった。さっきまで一緒にいた母親は近所のおばさんと並んで、お姉さんは自宅で黒焦げになって亡くなっていたそうだ。

この話を聞き全身に鳥肌がたった。今の私たちには想像できない光景であまりにも非現実的だからだ。

また、長崎の原爆資料館に行くと十一時二分で止まった時計、何万人もの命を奪った原子爆弾、熱で溶け変形した瓶、焼き場を見つめ息絶えた弟を背負い、唇をかむ小さな少年の写真、どの展示品も生々しく見えて胸の奥がしめつけられた。実際に自分の目で見たことにより、その悲惨さ、むごさを痛感した。この日が初めてちゃんと平和と向き合ったと思う。

戦争の怖さを知った今、私がやらなければいけないことは何だろうか。それは、この事実を忘れないこと、戦争を知らない未来の人たちに伝えていくこと、平和でいられることに感謝をすることだと私は思う。

一年に一回は必ず訪れる八月九日。この日になると長崎平和祈念式典が行われる。ニュースでよく目にする人も多いのではないだろうか。しかし、その中でただのニュースとして見ずに、黙祷をしたり、原爆について知ろうとしている人は何人いるのだろうか。

今の日本には戦争がない。私は何の変哲もない一日を当たり前のように毎日すごしている。きっとそれは明日も明後日も同じだろう。この日々が当たり前化しているのは、核兵器の恐ろしさを知る出来事があったからだ。

七十五年たった今、被爆者の方は日を追うごとに亡くなっている。被爆者の方が生涯を

通して伝えてくださった思いを次は私たちが伝えていく番だ。何年たっても忘れてはいけないこの日を。いつか世界が核兵器を持たなくなることを信じて。

第19回平和の主張コンクール
佳作

私の主張

北海道釧路明輝高等学校 2年 原口 星那

平和とはなにかと聞いた時、多くの人が思い浮かべるだろう。『戦争・飢餓・病気がなくなれば』と、『いつも通りの日常があれば』と。しかし果たして本当にそれが平和と言えるのだろうか。

“いつも通りの日常”という言葉に私は疑問を覚えた。“いつも通り”が“平和”であるとは限らない。いつも虐待を受けている子はどうか。いつもいじめを受けている子は、いつもお腹を空かしている子は、毎日毎日死んでしまうかもしれないという恐怖の中生きていく人々はどうか。彼らにとって“いつも”とは平和なものであるといえるのか。ずっとこんな生活が続いて欲しい、と思うのだろうか。

つまり私が言いたいのは“いつも通りの日常”とは今幸せだから言える言葉なのだ。このご時世、テレビやスマートフォンでいろいろな情報を知ることができる。今の社会問題については日本国内では、いじめや虐待。世界では、紛争や戦争。そういった現状が取り巻いている。

そのなかでいつも通りの日常が幸せと、口を揃えて言う私たちは結局のところ“自分以外の誰か”は眼中になく、自分自身のことしか考えてないから言えるだろう。

しかし、争いがあるからこそ、それが無くなった時に幸せだと感じるのではないだろうか。一日飲まず食わずの時になんてことないおにぎりを食べる、それはきっと信じられないくらい美味しく感じるだろう。病気にかかり体の一部が無くなるのではないか、このまま命の灯が消えてしまうのではないかと思うからこそ完治した時にそれはもう喜ぶのだ。

満たされない状況があるからこそ、満たされている状況がより素晴らしく感じるのだ。

ところで、私はよく曾祖母から戦争についての話をよく聞いていた。曾祖母は当時十代半ばだった。父親の仕事の関係で満州に住んでいた。そこから中から銃声が聞こえ、親しい友人も数え切れないほど死んだ。学校では薙刀を持って一人でも多くソ連兵を殺せと教えられていた。女は髪を切り坊主頭にし、顔を黒く塗って男装をし、胸ポケットにはいつも毒を潜ませていた。家にソ連兵が押しかけて来るたびに女、子供は屋根裏部屋やストーブの下に掘った地下へ逃げ込んだ。

そんな状況が数年続いた。戦争が終わった後も食べるものも住む場所もなく何度も死ぬ思いをした。けれど、家族や仲間と支え合うことができたから生きることができたのだ。と曾祖母は言っていた。

平和とはそれよりもひどい状況があるからこそ感じるができるのだ。だから平和を感じるためにも戦争はもう二度と起こしてはいけないし戦争があったことを忘れてはいけない。そして今一度支え合うしか生きていける方法がなかったあの頃を思い出すべきだ。そしたらきっと私達は本当の意味で“平和”を見出すことができるだろう。

